

成果報告書

私はこのサマースクールに参加するまでは、アジアと欧州の関係は遠いものだと考えていた。しかしサマースクールでの授業やワークショップ、フィールドトリップを通して、両地域は私が考えてきた以上に関係性が深いことに気が付いた。以下、自身が感じた点や成長できたと思う点を述べていきたい。

講義を通して学んだこと

一週間目は韓国(ソウル大学、韓国開発研究院(KDI School))、二週間目はベルギー(ルーヴェン・カトリック大学)にてアジアと欧州関係について学んだ。

まず本プログラムに参加して良かったと思う点は、英語で自身の意見を求められる機会が多かったことである。平日は朝から晩まで集中的に英語での講義があり、特に初日は授業内容について行くことで精一杯であった。しかし回が進むごとに学生同士の中も深まり、自身の英語力でもディスカッションが可能ということに気付いてからはグループの話し合いでも臆せず自分の意見を言えるようになった。常に自身の意見が英語で求められる環境は海外の大学でないと得られない。同じ興味関心を持った学生が集まりディスカッションをする機会は非常に楽しく、受け身でない姿勢で授業に臨めたことは自身の成長に繋がったと思う。

また、2週間で2か国・3箇所で学ぶというハードなスケジュールだったが、それぞれの大学の強みを生かした授業が展開されていた点が面白かった。例えばソウル大学では韓国の成長や東アジア共同体についてなどアジアの視点から学んだ。KDI Schoolでは開発の側面からの授業を受けた。ルーヴェン・カトリック大学では、EUで勤務されている実務家の講義やロシアの教授など多様な視点で学ぶことができた。

その中でもソウル大学で受けたラモン教授の講義が心に残っている。ラモン教授はロンドン大学キングスカレッジの教授で国際政治がご専門である。ソウル大学との関係が深く、今回ソウル大学で2回講義を担当してくださった。先生の授業はアジアと欧州の関係を欧州の側面から見るというものであった。普段は日本の視点に立って国際政治を見ることが多いので、欧州の視点からアジ

アを理解しようと努めることでアジアを客観的に見る機会となった。

先生の講義の中で特に印象に残ったのは「Long term goals が外交のキーとなる。」という言葉である。アジアと欧州は確かに地理的には遠い。しかし同じ長期的な目標を共有することでますますの協力関係を築くことができると感じた。

ラモン教授の英語は私にとってはやや早く生徒に発言を促すスタイルの授業であったため、頭をフル回転させる必要があった。そんなに多くは発言できなかったが、私の意見に対して先生がリアクションをくださったことはその後の自信に繋がった。

フィールドトリップ等を通して学んだこと

講義のみならずワークショップやフィールドトリップなどもプログラムに含まれていた。ワークショップでは授業内で学んだことや考えたことをお互いに共有し一つの形にアウトプットする機会となった。またフィールドトリップでは実際に現地に足を運ぶことで、その国の歴史を肌で感じる事ができた。韓国の世州市では世州歴史博物館や大統領アーカイブスへ行き、清州市では韓国の古い町並みを歩いて回った。ベルギーでは実務家と教授が対談する会議に出席したりフランダース地方へ訪れたりなどした。

まず KDI School の最終日に行われたワークショップについて振り返る。このワークショップでは講義で学んだことを学生同士で共有した後、「アジアとヨーロッパとの連携の可能性」というテーマについてグループに分かれて考えた。サマースクールに行く前に漠然と考えていたアジアと欧州関係の弱さは講義を通して協力の余地があるという考えに変わっていた。そして学生同士で話し合うことで様々な意見に触れることが出来、より考えをブラッシュアップすることができた。私たちのグループは第 3 国を介してアジアと欧州の協力関係を深めるという点に着目して発表を行った。例えば開発という視点からである。アジアと欧州は共有している価値なども多い。距離感や地理のみから測るものではなく多くの尺度が存在しうることを、ワークショップを通して感じた。

フィールドトリップで最も心に残っているのは、フランダース地方へ訪れたことである。フランダース地方は第一次世界大戦で直接の戦場となり、ヨーロッパ各国とその同盟国の兵士が多く命を落とした。第一次世界大戦の跡地はどこも美しく静かであった。私たちはクリスマス休戦の地や共同墓地、インフランダースフィールドミュージアム(戦争博物館)へ行った。川を隔ててクリスマス

の日に停戦状態が続いたという場所は、今では塹壕と野原が広がっていた。共有墓地では整然と並べられた白い墓石の周りに赤いポピーがよく映えていた。今は静寂なその場所で約 100 年前に起こったことに思いを寄せると、平和の大切さが身にしみた。

最後に

人と人との交流は国家関係の強化につながるか、ということについて最後に述べてみたい。私は今まで人と人との関係が広がれば究極的には国家間関係が良好になるのではと漠然と考えてきた。ラモン教授は講義の中で「外交では「枠組み」を作ることが非常に重要である。」と述べられていた。これは経済の枠組みが制度上作られることで、その後の両国関係に寄与するという文脈で述べられたものである。私は政治の観点からも同じことが言えると思う。もし国家間で戦争という関係が作られてしまったら、人と人との関係性は引き裂かれてしまう。それによって兵士と兵士とが傷つけ合わなければならなかった先の戦争を思い起こすと胸が苦しい。戦争のみならず国家間同士に政治的な問題があれば、両国の個人が関係性を深めることにも限界があると思う。であるから国家間の良好な関係が非常に重要なのであって、それが基盤となって人と人との交流の促進や国家自体の繁栄にも繋がるのではないか、とプログラムを通して考えた。

私がサマースクールに参加する前に感じていたアジアと欧州の「距離感」はある意味では当たっており、またある意味では外れていた。地理上離れていることは間違いなく、それゆえ地域の問題に関しては関心の濃淡が生まれやすいことは確かである。しかし、外交現場では協力できる点も多くあるとプログラムを通して感じた。そしてアジア欧州の関係強化は今後ますます求められると思う。そのような関係強化に少しでも貢献できるような人材になれるよう、自国での勉学に励みたい。